

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	木谷 隆太郎	学校名	東京 都 ・道・府・県 立 駒場高等 学校
担当教科等	地理総合	対象学年（人数）	1 年 1 ～ 7 組（ 280 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025 年 12 月（ 2 時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：地理総合(高校1年生)		
2. 単元名と単元目標 単元名：世界の多様な環境と人々の生活 単元目標：①世界各地の自然環境とそこに暮らす人々の生活の多様性を理解する。 ②気候・都市化・経済発展・社会階層などの事象を関連付けて捉え、発展の成果と課題の両面を踏まえながら、持続可能な社会づくりの視点から考察する力を育成する。 ③日本の都市発展の過程と関連付けながら、バングラデシュの都市が抱える課題について考察する力を育成する。 関連する学習指導要領上の目標：世界や日本の自然環境と人間生活との相互依存関係を理解し、現代世界の諸課題を多面的・多角的に考察し、公正かつ持続可能な社会の構築に参画しようとする態度を養う。		
3. 単元の評価 規 準	①知識・技能	・複数の資料を用い、バングラデシュの発展と課題を見出すことができる。
	②思考・判断・表現	・複数の生活階層を比較し、多面的に考察できる。
	③主体的に学習に取り組む態度	・日本や自分の生活と結びつけて学びを深められる。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童／生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由・単元の意義】 本単元「世界の多様な環境と人々の生活」は、自然環境と人間の生活や経済活動との関係を地理的視点から捉え、持続可能な発展のあり方を考察することを目的としている。 熱帯に位置するバングラデシュは、縫製業を中心とした経済成長とインフラ整備が進む一方で、都市の過密や社会的格差、気候リスクといった課題を抱えており、「発展の成果」と「課題」が併存している。 こうした二面性は、生徒に発展と課題の相互関係を多面的に考察させる上で有効な教材であり、現代的・国際的課題を主体的に捉える契機となる。 【児童／生徒観】 生徒たちは世界の様々な事象に関心をもち、学習に対して前向きな姿勢ではあるものの、自分の意見を表明することに関しては控えめである。そのため、具体的な事例の提示や問いかけを通して思考を引き出すことが重要である。また、写真や統計などの一次資料を扱うことで、生徒の学びをより主体的なものへと促す必要がある。	

【指導観】 授業では、第1時において写真資料を用いたフォトランゲージを行い、生徒がバングラデシュの都市にみられる発展と課題を直感的に捉える。その後、バングラデシュの統計資料を用いて、写真から読み取った事柄の背景を整理する。さらに、東京の戦後復興期の写真を示し、都市が発展の過程で抱えてきた課題の共通性について考えさせる。 第2時では、都市における社会階層の違いに着目し、教育支援を例にどの層への支援を優先すべきかをグループで考察させる。多様な意見を交流する活動を通して、発展の成果と課題を踏まえながら、持続可能な発展に向けた視点を養っていききたい。	
--	--

5. 単元計画（全2時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1 本時	写真から読み解く都市の発展と課題	写真をもとにバングラデシュの都市にみられる発展と課題を読み取り、過去の東京の姿と比較しながら考察する。	・バングラデシュ・ダッカ周辺の写真を提示し、班で読み取る。 ・読み取った内容をもとに、都市の発展と社会課題について意見を共有する。 ・日本の戦後の都市写真を手がかりに、「発展と課題はどの国にもあったのか」を考える。	・写真資料（バザール、ダッカ MRT、縫製工場など） ・統計資料（人口ピラミッド、輸出額・輸出品目の推移など） ・地図（色別標高図など）
2	バングラデシュの都市発展と社会階層	経済成長と社会課題の両面を踏まえ、都市における社会階層の違いに着目しながら、持続可能な都市発展に向けた支援について考察する。	・ダッカ周辺において想定される4つの社会階層の生活や教育環境を比較する（①国際機関や外資系企業に勤務する家庭の子ども、②国内企業に勤務する家庭の子ども、③非正規・不安定な仕事で働く家庭の子ども、④ストリートチルドレン）。 ・班ごとに、国の目指すべき姿を想定し、それに向けて教育分野で優先して支援する社会層を考察し、理由を整理して発表する。 ・日本を含む様々な主体による支援の在り方を整理する。	・写真資料（現地で撮影した参考となる4種類の学校） ・4つの社会階層を整理した図表

6. 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：経済成長と社会課題の両面を捉え、持続可能な都市の発展を考える

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	●研修で撮影した写真を提示した後、Formsを用いてバングラデシュに関する事前認識やイメージを把握・共有する。	●ワークシート(A4)サイズを配布する。
展開1 (15分)	●現地で撮影した写真を1班1枚ずつ配布し、その写真にふさわしいタイトルを考えさせる。班でそのタイトルにした理由をまとめ、班代表がタイトルを板書する。	●班ごとにA3サイズでラミネートした写真を配布する。1班5人で8班に配布する。

展開 2 (10分)	●各班が考えた写真のタイトルと、その理由を発表する。 他班の発表を通して、一枚の写真から多様な読み取りができ、都市の発展や課題について様々な視点が生まれることを理解させる。	
展開 3 (10分)	●生徒の板書をもとに、バングラデシュの首都ダッカにおける都市発展と社会課題についてスライドや動画、統計等を含めて整理・解説する。 ①バザール…都市の活気と庶民のエネルギー 熱帯の気候ならではの果物が流通 ②町中の雑踏…都市のにぎわいを示す一方、人口集中による交通渋滞やインフラの脆弱性といった課題も読み取れる ③縫製工場…バングラデシュ経済を支える産業の一つ 人口ピラミッドからは人口ボーナス期にあることがわかる。女性の雇用機会は拡大している一方、月給は3万円程度と低水準 ④Aarong の店舗…世界最大規模の NGO「BRAC」が運営 農村部の女性を積極的に雇用するなど、経済活動と支援を結び付けた取り組み ⑤ダッカ MRT…都市の交通渋滞緩和を目的として整備 近年のインフラ整備の進展や、JICA による支援の一端を示している ⑥BRAC くもん…高所得層の家庭の子どもたちを対象 日本と同様の学習形態で冷房完備 ⑦雑多な旧市街…インフラの脆弱性と衛生リスク 過密ゆえ上下水道や道路の整備が進まず ⑧果物を売る少年…たくましく働く姿である一方、貧困や教育機会へのアクセスといった課題も	●生徒の発言と重複する部分は触れる程度にし、写真の背景について解説していく。
まとめ (10分)	●東京の戦後復興期の都市写真や1960年代の人口ピラミッドを提示し、バングラデシュの事例と比較しながら、都市が発展の課題で抱える課題の共通性について考えさせる。 ●数名の生徒の感想を共有した後、Forms を用いて本時の振り返りを回収し、次時は、「どの社会層への教育支援を優先すべきか」をテーマに学習を進めることを予告する。	●日本も戦後復興期には世界銀行など国際機関の支援を受けながらインフラ整備を進めてきたことに簡単に触れる。
7. 資料（教材） ・写真資料（A3 サイズに印刷したものを班に1枚ずつ配布） ・統計資料（日本との人口ピラミッドの比較、GDP の推移、色別標高図） ・人物カード（各社会階層の生活や学習環境を想定したモデル）		

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・ Forms への記述内容および発表の様子をもとに、都市の発展と課題の把握や、多角的に考察しようとする姿勢を確認する。

9. 学校外との連携 なし

10. 学びの軌跡（児童生徒の反応・変容、感想文、作文、ノートなど）

授業冒頭に、バングラデシュについて①知っていること、②イメージについて Forms で回収した。

①「知っていること」では、約半数の生徒が「国旗が日本と似ている」「人口が多い」「イスラム教の国」「衣類・縫製業がさかん」といった内容を回答していた。一方で、「特に知らない」「イメージがない」とする回答も一定数見られ、生徒の知識や関心にはばらつきがあることが分かった。

②「イメージ」では、「発展途上国」「人口が多い」「貧困や格差」「治安や衛生面があまり良くなさそう」といった印象が多く見られた。一方で、「衣類・縫製業が盛ん」「農業や稲作が盛ん」「人がフレンドリーそう」といった回答も一定数あり、生徒の中で多様なイメージが混在していることが分かった。

フォトランゲージでは、班ごとに 1 枚の写真から多様な意見が出され、写真を手掛かりに生徒が自分の考えを言語化し、なぜそのように読み取れるのか考える様子が見られた。

例えば、「果物を売る少年」の写真を扱った班では、「服装はそれほど悪くない」「子供の表情は暗くない」といった読みが示され、生徒がもっていたいわゆる児童労働のイメージとは異なる側面に気付く場面も見られた。



第 1 時に実施したフォトランゲージの様子

授業後の感想では、「日本」と結び付けて捉える記述が多く見られた。写真→統計→戦後日本の写真という学習の流れを通して、バングラデシュを単に「遠い国」としてではなく、都市化や人口構造、インフラ整備、格差といった地理的概念を用いて相対化し、時間軸を伴って理解しようとする変容がうかがえた。参観者からも、「写真から想像した現実を統計で肉付けし、日本の経済成長とも重ねて時間軸を意識させる構成が効果的であった」との評価が寄せられている。

また、写真にタイトルを付けるフォトランゲージの活動を通して、「同じ写真でも見方によって意味が変わることに気付いた」「他者の視点を知ることによって理解が深まった」といった記述が多く見られ、事象を一面的に捉えるのではなく、多面的に考えようとする姿勢が育まれていた。

一方で、「汚い」「狭い」「旅行はまだ難しそう」といった反応もあり、衛生面や過密といった都市課題を強く印象づけた生徒もいた。しかし同時に、「貧富の差は単純な同情で捉えるべきではない」「低賃金産業の恩恵を自分たちも受けていることに気付いた」といった記述も見られ、経済成長の中で生じる格差を多面的に考えようとする姿勢が表れていた。これらの反応を踏まえ、次時以降では、都市課題を問題の列挙に終わらせるのではなく、どの社会階層がどのような条件下で課題に直面しているのかという視点へ接続し、理解を一段深めていきたい。

【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	ダッカ市街を中心とする現地視察を通じ、街の活力と、同じ都市空間に存在する格差の現実を観察した。特に、BRAC くもんの担当者から聞いた1か月分の学費と、現地でストリートチルドレンを支援する NPO 関係者から聞いた子どもの1か月の生活費が同程度であることに気付き、教育機会に留まらない格差の大きさを実感した。 また、同じ「学校」であっても、冷房やパソコンなどの設備が整ったインターナショナルスクールと、空調や照明が十分でない学校とでは、学習環境に大きな差があることが印象に残った。 これらの気づきをふまえ、本実践では、「バングラデシュの首都ダッカにおける発展と課題」、そして、「どの社会層への教育支援を優先すべきか」という問いを設定し、経済発展の成果と課題を多面的に捉えさせる教材として位置付けた。
12. 苦労した点	写真資料は生徒に強い印象を与えるため、貧困や危険といった先入観を助長せず、同時に現実から目を背けさせないバランス調整に苦労した。フォトランゲージでは自由な発想が生まれる一方、断定的な読みへ傾く場面も見られたため、「どこからそう言えるのか」と写真の情報に立ち返らせる問い返しを意識した。 また、1時間の中で写真読解・統計による背景整理・戦後日本との比較・振り返りまで行う必要があり、活動のテンポ設計と説明量の取捨選択が難しかった。
13. 改善点	今回用いた8枚の写真はいずれも探究活動の教材になり得るものであり、個々の写真についてより深く掘り下げる余地があった。しかし、時間の制約上そこまで展開できなかった点は今後の課題である。 また、自分たちの着ている服にもバングラデシュ製のものが多いことから、消費行動などを通して生徒自身の生活との接点を意識させる設問を加えるなど、学びの自分事化を一層図っていきたい。
14. 成果が出た点	授業前 Forms によって生徒の既有知識やイメージを可視化したことで、認識の差を前提に授業を進めることができ、写真読解において多様な視点が生まれやすくなった。 また、フォトランゲージ→統計→戦後日本との比較という構成により、バングラデシュを異質な国としてではなく、都市化や人口構造、インフラ整備といった地理的概念で整理し、時間軸を伴って理解させることができた。
15. 自由記述	本実践では、バングラデシュの「活力」と「課題」を対立的に扱うのではなく、同じ都市空間に併存する現実として捉えさせることを重視した。写真資料によって生まれる感情的な反応を、統計資料や日本の戦後復興期の事例で相対化することで、生徒が「発展と課題は多くの国に共通する過程である」と捉え直す姿が見られた。

参考資料・使用教科書：

栗田和明、根本利通(2015)『タンザニアを知るための60章【第2版】』明石書店

公益財団法人矢野恒太記念会編(2024)『世界国勢図会 2024/25』

資料：フォトランゲージで各班に配布した写真

1 班：バザールの果物店



2 班：ダッカの雑踏



3 班：縫製工場



4 班：商業施設(Aarong)



5 班：ダッカ MRT



6 班：BRAC くもん



7 班：ダッカ旧市街



8 班：果物を売る少年

